

# キャップで繋がるみんなの“輪”

## 若い子たちの交流の場

菅原さんは知人に誘われて「小美玉市さくらフェスティバル2011」の実行委員になったのがきっかけで、みの〜れに出入りするようになったという。「エコキャップアートが決まり、まずデザインの話になり、みの〜れのキャラクターであるバードを選びました。その後も実行するまでの計画の話し合いは、想像以上に大変でした」と話す。また、水戸市の文化デザイナー学院がエコキャップアートに取り組んでいるという話を聞き、その先生と一緒にアートでデザインや、作り方を実行委員と奮闘したそうだし、しかし、さくらフェスティバルは震災で中止になってしまった。「地震が起こったときは、キャップがどうなったか考えていましたよ」と、

当時を振り返りながら語ってくれた。震災後も、エコキャップアートの実行委員は、この企画を継続するため、地元の中央高校の生徒にも声をかけ、活動が再び始まった。キャップの色分け作業から始まったが、約種類以上にもなるので、最初はにこしながら始めるが、次第におっくうに感じる事もあったそう。しかし「仕分けをしなから友人関係を深めていくことも出来た。高校生も若い実行委員もみの〜れの敷居を高く感じていたが、エコキャップアートを通じて、みんなの憩いの場となっていた」と話す。菅原さんの優しい人柄が、みんなの心の引き出しをそっと開けた瞬間だったのでは？

また、夏休みを利用して、市内の小学校を訪問し、放課後子どもプランの児童を対象に行い、世界に一つだけの20羽のバードが完成した。「子どもたちは目をきらきらさせながら、あつという間にキャップを仕分けしてくれました。大人よりもずっと早く仕分けしたのは驚きでした」と話す。菅原さんは「始まる前は携わってくれた人たちと距離感を感じたが、作業が進むうちに距離がぐつと縮まって和気あいあいと出来た。仕事帰りや学校帰りの学生も手伝ってくれて、すごく楽しかった。出来上がったいく喜びは最高」と話す。菅原さんにとつてみの〜れは「ぶらっと寄れる喫茶店の様な所。かしこまった所ではなく自然体でいれます。新しい風が吹き込みました」と話してくれた。モザイクアートは11月3日から約1カ月間みの〜れで展示される。参加した子ども達にぜひ見に来て欲しい。今にも飛び出しそうなバードに出会える日を、今から楽しみにしています。

藤田佐知子



「子どもと一緒に活動できて楽しかった。みの〜れに関わるようになって新しい人脈ができて新鮮です」と語る菅原さん。

エコキャップアート実行委員長

菅原 常大<sup>さん</sup>

みの〜れと共に生活するスタイル  
**Minole Life**  
のすすめ  
No.51

黄金色に輝く稲穂の絨毯が秋風に揺れている。私たちが毎日のように手にしているペットボトルのキャップは800個で20円になり、発展途上国では小さな子どもたちのポリオワクチン1人分になる。今回はそのキャップを使用して絵を描く「エコキャップアート」の実行委員長を務め、江戸地区にお住まいの菅原常大さん取材する。